

# おいしい米づくり情報

2019/03/13

## 第1号

庄内総合支庁  
農業技術普及課  
Tel. 0235-64-2103

### ◆技術のポイント◆

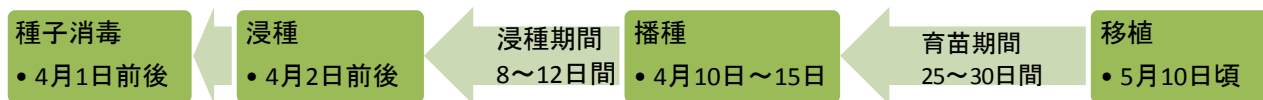
苗半作！健苗育成で順調なスタートを切りましょう！

引き続きプロクロラス剤（スポルタック剤）耐性イネばか苗病菌への対策を！

### ○作業計画

高品質・良食味生産のため、移植の適期は5月10日頃となっています。近年、移植が遅くなり収量が低下してしまう傾向がみられます。移植日から逆算して計画を立てましょう。

●移植日から逆算した育苗計画の一例



### ○作業場所の管理

- 罹病したワラや籾殻にいる菌が浸種桶や催芽機へ飛込むのを防ぐため、種子を取り扱う場所の周辺を清掃しましょう。
- 前年、ばか苗病の発生が多かった場合は育苗箱の消毒を行いましょ。

### ○薬剤消毒時の管理

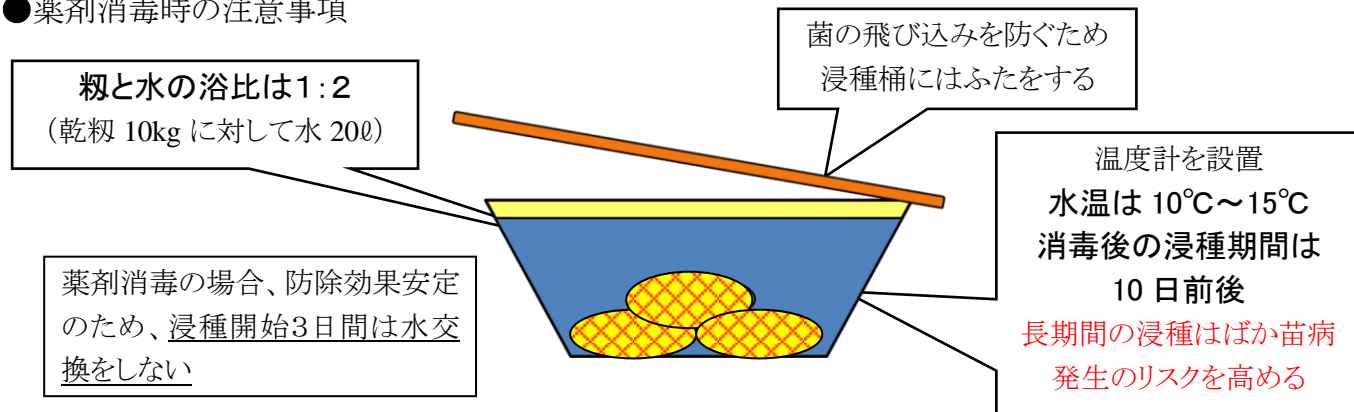
- 薬剤消毒の場合、薬剤の種類で対象病虫害や処理方法が異なります。各薬剤の定められた希釈倍率や処理時間を遵守しましょう。
- 薬液に浸漬したら必ず籾袋をゆすって薬液が内部まで十分にゆきわたるようにしましょう。
- 水温が低いと防除効果が低下します。10℃未満にならないように水温を保ちましょう。

24時間浸漬の場合の希釈倍率、水量の例

薬剤名	希釈倍率	水量・薬液量の目安
テクリードCフロアブル	200倍	乾籾10kgに対し、水20ℓ、薬液100ml

※テクリードCフロアブルは、種子消毒後風乾すると防除効果が高まります。

●薬剤消毒時の注意事項



※特にテクリードCフロアブルを使用した場合、10℃未満の極端な低水温での浸種は催芽や発芽が遅延、抑制されます。

## ○ばか苗病の耐性菌に注意

平成29年に庄内地域でプロクロラズ剤(スポルタック剤)耐性イネばか苗病菌の発生が確認されました。昨年は薬剤の切り替え等により発生は抑えられましたが、引き続き注意願います。

以下の方法により、適切に防除を行ってください。

1. プロクロラズ剤の効果が低下している場合は使用を中止し、イプロコナゾール剤(テクリード剤)など他の薬剤による種子消毒を行う。
2. プロクロラズ剤の効果が低下していない場合であっても、耐性菌出現防止のため薬剤選択に留意する。プロクロラズ剤を使用した場合は、ばか苗病の発生状況をよく観察する。
3. 温湯消毒や生物農薬による種子消毒を行う。
4. 採種圃及び採種圃周辺の圃場ではプロクロラズ剤を使用しない。

## ○温湯消毒時の管理

- 1 温湯消毒を行う際は、「58℃ 20分」または「60℃ 15分」を厳守しましょう。  
(ただし、使用する温湯消毒機の説明書に温度・時間の記述がある場合は説明書に従う)
- 2 浸種直後、水面上に種子袋を5回ほど上げ下げし、種子袋の中心まで温度が上昇するようにしましょう。  
また、温湯消毒後はただちに冷却し、そのまま浸種します。

### ●温湯消毒 冷却・浸種時の注意事項

- 浸種水量は、乾籾 10kg あたり 30ℓ以上を十分確保する。
- 菌の飛び込みを防ぐため浸種桶にはふたをする。
- 温度計を設置して水温は 15℃未満。
- 2～3日に1度程度で水交換を行う。

## ○浸種時の管理

- 1 浸種初日の水温が低いと発芽率が低下するため、浸種初日は水温(10℃以上)を必ず確認してから浸種しましょう。
- 2 水量・水温に十分気を配り、水温を10～15℃に保ちましょう。日平均積算水温を、ササニシキ、モチ品種では 100℃、はえぬき、ひとめぼれ、つや姫、雪若丸、コシヒカリ、酒米品種等では 120℃を目標にします。  
浸種に使用する水槽は直射日光が当たると水温が上昇します。水温 15℃を超えるとばか苗病が発生しやすくなるため、日よけをするか屋内(日かげ)に設置しましょう。
- 3 吸水ムラを防ぐため、3日に1回の割合で水交換を行い、水交換の際に種子袋の位置の入れ替えを行いましょう。
- 4 浸漬期間は、薬剤消毒を行った場合は 7～10日、温湯消毒の場合は 2週間程度を上限とします。

## ○催芽時の管理

催芽時間は、うるち品種では通常20時間程度です。30～32℃のたっぷりの温湯に袋全体を浸します。芽切れ・鳩胸状態をよく確認してから引き上げましょう。

※特に、休眠が深い品種の場合は、発芽の程度や揃いを必ず確認しましょう。

## ○播種

播種量は、稚苗の場合、催芽籾で180g/箱(乾籾で150g/箱)、中苗の場合、催芽籾で120g/箱(乾籾で100g/箱)を目安に播種しましょう。

**今年も間もなく米づくりの時期を迎えます。  
まずはワンチェック・ワンアクションで農作業安全**